

讀極史

分四寸三	コ	ヨ	紙	表
分九寸四	テ	夕		
分九寸二	コ	ヨ	棒	文本
分三寸四	テ	夕		

讚極史序

二天作と險約の政道具をもて。執權職れ貨殖積る。雄兵百万兩の家産も。吳魏蜀の三浦を以て築城して。床豆を生ふるよきて。薄望坡乃火の車。白河の水れありし世の中と

獨草の原に悟を聞て。穴れ穴故採。目八分は三分五厘を定て。二分自慢

の孔明氣も恐くぬ千代丘草菴乃。妙作虚言と思ふ。讀て流。孟徳新書の上を飛越す。上く古。飛切乃新書也。イガあれを味で。

讚極史と書とをさん中。右を祖くもれ也。

管菴のあり

さし丸採

讚極史序

二天作と。險約の政道具をもて。執權職の貨殖積たる。雄兵百万兩の家産も。吳魏蜀の三浦圍に築城して。床豆を生ずるに至ては。薄望坡の火の車。白河の水のあれ世の中と。獨草の原に。悟を聞て。穴の穴を採。目八分に三分五厘を定て。一分自慢の孔明氣取も。恐からぬ千代丘草菴のぬしが。此妙作。虚言と思はゞ。讀で御覽。孟徳新書の上を飛越す。上く吉飛切の新書也。イガこれを味で。讚極史と譽をやさんと。右を祖くものは。

鶴邊菴のあるじ

さし丸採 佐保



三國の英雄。蜀玄徳。吳孫權。魏曹操。天下を三ツにしてこれを守り。その意をうつて一統せんとはかりしが。吳魏蜀おかしおかす事を得ずして。こゝん氣つき。ぐつとし(ヤ)れるまで。玄徳は孔明にしんたいをあづけ。かれが別莊南陽の臥龍岡を引かへ。今は臥龍岡と名づけ。冬木の植込にし。利休が物數寄の夜燈。庭石は青の野面苔のさびよく。青桐に。垣根は芭蕉の氣どり。馬の鞍に。もゝの肉の不足になつたむかしもついいつしかなをりて。茶と通との物すきをないままで。今は徳玄と名をかへ。小僧一人つかひて。氣樂に暮す。この日雪ふりて。まつさき向ふ島とひねりたき心ちするに。それに引かへて。老馬にまたがり。小坊主に美酒と雞鹿等もたせ來るものあり。これ吳主孫權なり。古松の枝に雪をもたせたるをみては。中の町松の内雪の面

影あり。猿鶴の遊びたわむるゝを見て。かむろの行かふがどしと。一人をみよふくみてはや臥樂岡に至り。老馬よりおり雪を拂ひながら。路ちをあけて。徳玄さん御宿かねへ。○徳ある窓をこれは稀人の御出。こちらへあがりなせへ。○面白雪に心うかれ。雪見といふ氣どりで宿を出かけやしたが。おめへも今じや通に浮世はなかしと聞たから。それでめへりやした。○徳こいつサアありがてへ。切の破のは。やほなてんさ。そこもはやくらくにならつせへと云ながら二人共、こたつによるがい。○徳こふあつたまつちやア。三ッ蒲團をおもふせ。○徳皮の布岡よりは忘れられねへよ。小僧とりをあきや。○徳烏かいの小せいたがよかるふ。○小僧菓子○徳これは遠來妙だ。御せんじ茶をねがへやす。○徳幸ひ今いれやした。御心まかせにト浪華の業段堂好そのまゝ。○徳これはよい茶だ。蘭茶でも

ねへ。こそ製かな。○徳いや／＼日本の宇治さ。○徳名はなんと云の。○徳喜撰といふやす。せんじ茶の一さ。喜撰の新とときては。煎茶家のひねる所さ。折鷹。厂金もよいが。喜撰にや及ばねへ。○徳先達而董卓が所へいつたきや。妙な菓子をつくわせやした。萬やの名はわすれたが。白イ丸イ物さ。なにか。口へ入ると妙にとけやす。○徳ソリヤ最中の月といふ菓子さ。水どふの水をのまにや。アノ菓子はしるめへよ。ちつとそこも遊ぶがい。周瑜に諸事まかしにさつしやれ。○徳おれもそふ思ひやす。ちんせつをききやした。○徳なんだねへ。○呂布が此頃司徒王允が方から。貂蟬といふ美なる封きらすを貰ひやして。まだ内へはいれやせんが。女房にきまりさ。それを董卓がみて。むりに司徒が方から。横どりして。内へ連ていつたのさ。日本の五明樓でなければ。あんな美しいのは

ないといふことで。その婦人の仇名を日本でゴゼヘスといふげな。○徳こいつサアこうてきをだしたな。○徳そこで呂布も兄ぶんの事ゆへ。司徒にだん／＼いつたら。司徒も一寸のがれに。くるめたそうさ。そこで呂布も。ころりとなつていやした。其後。董卓が留主の時。風儀亭の次の間で。むりに貂蟬をいつてうおめにかげんとしたそうさ。そこへ。愷氣のふとつちようが来て。大騒動であつたそうさ。○徳あいつもゑへ年だらうにすぎなものさ。呂布はおおつけてあつたの。○徳時にめづらしい一軸があるの。このころお手に入やしたか。日本平安の宮筠園が竹とちちやア。今文人のひねる所さ。日本にもすけねへとみへて。新渡の近世畸人位といふ書を見たが。宮奇か竹の圖かでゝゐる。日本人も好事になつて。おらがほうのあきなひ唐人の書画などは。うれしが

らぬそうさ。○徳ふさ／＼。日本人はとかくおらが國ひのみがおほいが。俗語などを分解するは。こつちの手合はおよばねへよ。日本でもちかごろ大雅堂の書畫がはやつたが。もふ此ごろは見あきたとみへて。祇南海の山水。柳里恭の画讃などひねるそふな。○紙きのふは道具屋が日本渡りだといつて。吉野が文に大橋が自畫讃。高尾が自詠の色紙。山本勝山の短冊などをはりませた小屏風をもつてきて。これはおまへさまのはぐちでござります。今時もふ堂上や連歌師のたんざくでもござりますめへと。三味線をひいておいていきやした。新渡りの應擧や。月仙もたくさんあつてひねらねへぞ。○徳日本人も。元明あたりの書画でなければ。よろこばぬさふさ。 ト女徳時代ちがいの。○此の未來をまつて云。 〇このごろ日本では何がはやるの。○徳まづ五大力のめりやす。しばらくはなしのまげ

いはい。あなごのかば焼。くすべのたばこ入。煎茶の會に墨跡の交易さ。百膳の安うり。茶やなしの女郎買などは。びびなはやりさ。とにかくに世の中は三日見ぬ間に櫻かなだ。じきに流行におくれやす。○もちつとむまい菓子かねへかの。○徳小倉野がありやす。○紙きかねへ菓子だ。おらんだか。天竺ときいやはり日本さ。おらんだ天竺ときいやアむさくつてあやまりやす。 ト小僧を呼ばし。 菓子を取寄す。 ト小僧を呼ばし。 雲片香。かるめい

ふ大河を。ごふてきに馬でとばしたと聞たが。ほんの事か。○徳ナニそんな事じやねへ。劉表も通さ。大のみがあつての。げいしやが十枚ほどきて大騒ぎさ。それから大飲みになつて。こりやながく居ちやアぐつから。手水と見せてにげやした。あとからみな銚子をもつておいくる。檀溪ト言どぶがありやつておいくる。檀溪は大きな川のへだの。世間ちやア檀溪は大きな川のやふにいふせ。○徳なにさ。大門の小便所よりも小さかつたり暖簾をあげながら徳さん。どふだ。寒いおきこたつに隅田川にあつたまる気がなしか。○徳先生。ゑへ所へござつた。吳主もさきから來てさ。○徳これは／＼。赤壁以來不首尾さ。○徳またいやみをいふせ。○徳マア。此こたつに入たがゑへ。○徳こふ寄た所か。三ごく

した。○孫むたをいわすといふ。先生せんせいにあらつたら聞ふと思ふてゐやした。そこが董貴妃とうきひをしめころしたといふ沙汰さたがあるせ。○曹そんな不作ふさくはなしはながしにさつせへ。○孫ぼう。その董貴妃とうきひが大間おほまへ達たちだ。先生が腰元こしもとにいけねへのがあるのさ。抱瘡ほうそうでかほがみつちやになつたから。みなが唐黍たうしと云やす。それをしめこの山とでかけて。あんまりよろこびがすぎたか。先生がしめころしたをふさ。それを世間よぢや。まちがつて董貴妃とうきひをころしたといふやす。○孫こ一つア。面白おもしろたぬきのはらつとみだ。よつほどはなしになるの。○曹徳さんの云違うごねへよ。笑わらふ。○孫先生は許田きよたで鹿を射たそふだねへ。○曹あの楊弓やうきうにこつた時とき分ぶんは。ごふてきに。弓ゆみはよかつたよ。○曹又またうそをいふせ。おれもあの時ときでやしたが。承知しやうちのならねへ射かやうであつたよ。○曹イヤ實じつは矢やのついた鹿しかがかけて

きやしたから。そこで芝居しばいで弓ゆみを射るやうにしたのさ。こいつはどふだ。妙たぎないうちであらふの。○孫近所きんじよに人がいたか。よふみつけなんだの。○曹見たものもあつたろうが。そこが英雄いゆう人を欺あざむくのさ。○孫ソリヤ持前もちまへがでるよ。それだから。さらはるゝせ。○曹徳ぼうのいふ通りだ。兎角うさぎおれをばかたき役にするよ。○孫徳安とくげんさんほど。最さい辱じやくせらるゝ者はねへせ。○曹そふ又また白しろくのせるなよ。○孫そふじやねへ。ノウ曹公そうこう。○曹吳主ごしゅがいふ通りだ。百姓ひやくしやうにも。おやまにも。すかれる男おとこさ。めへと長坂坡ながさかでおれと大とりあひをしやしたその時も。百姓ひやくしやうが徳さんの徳をしたらうてみなくぶさ。○曹曹公そうこういやみな事をおかつせへ。あの時は百姓ひやくしやうも道づれがなかつたから。一所いよに行いやした。あの時はおれもおほつけさ。しかし先生も弟のごふてきものにはおそれたせ。○曹そふでもねへが。どふもそこと違つ

て。弟のめつぼうけいものだから話せぬよ。○孫先生もこれにやあやまるの。ぬいふてみな笑わらふ。徳安とくげん小僧しょうをよび。口くちとりに出す。○曹むまそふな菓子だ。名はなんとといふの。○曹橘たちばなやのせんべいまんぢうさ。○曹おれにはちつとこの御菓子ごかしは御免ごめんだ。とても御馳走ごちそうにあまくねへのをねげへやす。○曹わがまな客きやくだぞ。○曹小僧しょうをよび。○曹ソリヤなんだ。蠟石ろうせきの卦算けいさんのやうなものだせ。○孫そふ見られちやアあやまるよ。圓山えんざんの一葉岡いちようかうからもらひやした米餅まいへいさ。○孫おれも初はつてだ。ちつとけびを許ゆるさつせいと。菓子かしをとす。○孫ぼう。そこはこういふ宗旨しゆじぢげへだらう。おかつせい。○孫おいらは。なんでも口くちに入るがよしさ。徳さん司馬ししや微ゐが借かやへあかしやつた事ことはあるかの。○曹此頃このころはいきやせぬが。めへとはちかづきさ。よふ笑わらおやぢだよ。○曹あいつがよし。いも久ひさしいものだの。○孫よふ口くせのある男おとこだねへ。○曹さふさ。松葉まつはのお

つす。鶏舌のざんす。五明のほんざんす  
かへト。わたくし。みな口くせだよ。圃  
なんぞ。むまいものでも御持參か。圃角  
田川に鶏鹿さ。圃こいつはよかるふ。先  
生はなにを御持參だ。圃おれは氣をき  
かして。てつぼうとしやした。鶏鹿も久  
しいから。ひねつたのさ。圃おそろ／＼  
おれもこふ山にいるから。ふくには久  
しぶりだサ。はじめやしやう。圃小僧をよ  
品を料理。圃徳玄子。きうや。ゑへばんと  
うを入たそふだ。名はなんといふやす。  
圃はやうきいたせ。孔明といふよ。漸  
の事でかけへやした。圃雪ふりに度々  
いつたそふな。風でもひかぬへかの。圃  
なにさ。羊のちばんに銀鼠の羽織で。  
かぞみの雪踏。ぶつかむり頭巾といふ  
身で。内からはぶとふ酒じや。いかねへ  
とおもつたから。淡盛としかけていつ  
たよ。圃よふばける男だせ。圃よつほど  
通なものだよ。圃日本に何とやらいふ

作者があつて。徳さんが孔明の宅へい  
つた所の繪に。讀をしたを聞やした。

三たび草花を見かへり柳に

お蜀の大盡花をおします

梁甫の吟の歌藝者は客を

えらみて見番にかくろふ

とやらかしたげな。日本人も口はかる  
いぞ。圃孔明が呉の群儒と舌戦したと  
いふ沙汰がある。ほんの事か。圃世上で  
はそふいふそふな。そふじやねへ。わし  
が方へきやして。みなと地口のてんと  
りをしやしたが。孔明にかつものがね  
へよ。圃先生の次男曹子建は。狂哥は妙  
だ。先度角半で一庵しやしたが。日本  
の雄長老。豊藏坊。未得。真柳もはだし  
だ。よつばらいながら。七足のうちに  
豆の狂哥をしたがおそろしいよ。圃兄  
さんに似ねへおちやつついだ。圃あゝ  
云ものになつたから。養子にはしがる  
方もありやせん。しよせん。しうとの氣

にいらねへ事は見へているよ。圃酒と肴  
を田圃おかんを見やしやう。ト云ながら。

吳主の御持參ほどある。先生ひとつあ

げやす。圃このさむさじや。礼をばなが

しにしやす。圃のみ者なんだ。粕づけのた

けのこか。醜醜のむし竹をおもふせ。圃

おれは御酒はあやまる。菓子子の事さ。

亭主ぶりに。もつとだしねへ。圃モウ菓

子もなしさ。圃そふいわすと。何ぞあろ

うせ。げびぞうを出そふと。たなを明とり

かいの九重まんぢうあるよ。これちや

アおめへかたの樂ひうち。てれはしね

へぞ。圃魏主龐統が連環の謀には。こ

ろりとしたの。圃なにさ。あれくらしいの

手は承知さ。船を数つなぎやすと。ふ

ら／＼しねへよ。酔ばらいもあぶなく

ねへさ。中洲のはつかふな時ふん。花

火を見る船からあんじた謀計。圃鉢を

横たへて詩を賦すと。あのやぶなうぬ

はれをだすから。大きなめにあつたさ。  
[曹]そふじやねへ。あのときやア茶番のしやした跡は大のみさ。[函]その大のみがすぎて。あぐけに喧嘩になつたそうだせ。[曹]そんなきざは通者はいわねへもんだ。笑ふ。孫公赤壁ぢや。じつにこそすきであつたけへ。[函]實さ。[曹]めつぽつけへな。おれはそふと思はなんだ。周瑜も。徳さんの弟の張飛に似た氣だせ。[函]周瑜もむりはなしさ。董卓と云しうちにかみさんをとろふとするから。周ほうもあれくれへにはするのさ。[曹]そふじやねへ。風をつよいに。むしやうに火をかけやす。おれをば鰻のかば焼にするきとりざかしねへ。孔明があつた風をいのつたといふがほんかの。[函]ほんの事さ。[曹]承知しねへぞ。万八だらう。[函]い、時に風がふいたのさ。あれで孔明も名をあげやした。[曹]わしが方に管輅といふ占へ者があるが。妙にあたる

よ。[函]いかぬ弊にしてしん田町にござる法印さんの守り御札やうらやさん。[函]餘程い、せ。いつちまわりをやつたの。[函]おれもかふならねへ先は。あれぐれへのものさ。[曹]そこちがつて。弟の關羽はよい人だ。ほんの兄弟か。[函]三人共兄弟ふんさ。しろがね町の出みせの。高なはの桃林で。義をむすんだのさ。[曹]どふりで似ねへよ。貴様は中てびんぼうらしいせ。[函]おきやあがれ。この耳を見ていふが。い。おれが目で見ゆる大福みだ。[函]弟のひげは珍しいものだ。拂子にして賣つたらよからうせい。[曹]松葉のけいに見せたら。ばからしうほつすといふであろふ。人がよすぎてたまそふよ。ちつと兄きをあやからしてへ。[函]そこが華容道であぶねへ所を。弟をかりりとだました。それでそふいふのか。[曹]あの時は。おれも仕方なかつたから。何でも。つよく出ちやア。大きなめにあ

ふとおもつたから。ぐつとやつしかたといふ身で。此太夫がうれい場の氣どりをしていつたよ。そこで關羽もあの正直だから。眞受にして其場はにげやした。しかし兄さんよりは人がいよ。[函]弟をば雪ころがしのやうにするせ。[曹]先生のひげも。もちつと長くおもつたが。みちけへせ。[曹]あまりなげへと。女はきろうよ。それで少しきつたのさ。[函]うそだ。馬超にはひどへめにであつて。たびうど客に夜具をきつかけた傾城のかみを見るやうに。せびなくきつたげな。[曹]よふ穴をおぼいいる男だ。この事はしるめへと思つたが。[函]どんなめにばかりあふの。[函]先生許諾はよくしてやらつせへ。貴様の命の親だよ。あの時あれがいわねへと。貴様は今時分は。何居士とかいわれるせ。[曹]あれはよくのねへ男さ。酒さいかつてあづけておくといよ。[函]おれが方の



甘寧かんねいといふものだの。トいふ所へ。小僧来ぬ  
リニツツのせしほ。利休か。徳先生御待か  
たの數寄屋第三せん付持出る。徳先生御待か  
ねだらう。圃これじやア雪のふるも一し  
は詠めになりやす。孫公の御持參。先雞  
鹿と致しませう。圃おれはふたとひ  
ねつて見やしやう。圃おれはふたとひ  
をば病人びやうじんにくわしたがるの。徳そふさ。  
かたくなにおぼへた醫者さ。藥撰に  
は。あれさへくゑば無病になるやうだ  
せ。しかし狩人かうじんにはゑてけへどくがあ  
るよ。圃おれは鶏けいはきついすきさ。圃貴  
様の鶏けいも久しいものだよ。圃けびぞ  
ふな魏王ゑいおうだ。圃そこがおとなしそふに  
みゆるから。世間じや女めきれへのやふ  
にいふよ。圃おれ程沙汰しやたのねへ者はあ  
るめい。圃なにさ。孫ぼうが。圃の孫  
夫人をさへせつたでねへかの。圃ゑ  
んりよをいふ男だ。このかわりは。むす  
子の子桓しごんがいる所で。大橋おおいしほ小橋こしほをよこ  
所にして。兄弟けいだいぐるめにとほしきや

うと亦壁またかべの大つけをいふぞ。とはなしなが  
を嘆なげまい。しばらくあつ。珍珠しんじゆなるかな。圃  
て。小僧せうそうぶぐるを出す。珍味ちんみなるかな。圃  
かんにんならぬふくと吉原とは。よつ  
ほど出来やした。圃こいつサア妙だ。そ  
の上の句はなんといふの。圃北きたむきは  
いづれも毒どくとはしりながらさ圃おそろ  
／＼日本にっぽんだ。圃孫ぼう。きつい和言をい  
ふせ。貴様きさまの國くにから船ふねちやア長崎ながさきへち  
けへから。よつほどいきな文句をだす  
せ。圃三人さんにんうちより。圃これくれへむめ  
物を。とふして日本にっぽんでいやがるの。外に  
むめいものがある所だから。それでは  
やるめへ。圃平安へいあんの宮川みやがわ町まちで。ふく汁じゆに  
よつほどあつたさうさ。圃どふりで  
新渡しんわたりりの書物しよぶつに。京色きやうしき里町りまち中はやり哥  
ふぐ汁じゆやめてほしいと言い標題たいていがあるせ  
へ。圃その哥うたをうたつてみやうかねへ。  
圃孫ぼう。ちつととうてへなさへ。と首くびし  
そ麻ま。たがやさんのどうに。蛇皮へびかわはどうやらさふん  
と首くびどりて。いつか日本風の三味線さんまいせんとなり。てふ

しを合あ サアどふだの。圃むすことみゆる  
して。こゑは面白おもしろかろふ。トいわれ圃醒さすこし  
が。こゑは面白おもしろかろふ。トいわれ圃醒さすこし  
げん。歌うたをなじ魚うまやの見せにあるふぐ  
かぬ聲こゑで。みるたびに思おもひだす。いつそゆくな  
ら三人づれで。のこる三人がたのしみ  
じや。そうじやそちや／＼。その氣で  
なければやめられぬ。圃そうじやい  
な。どくじやいな。五ご也に。三人さんにん大おほきに突つふ。  
圃ついでだから聞きやすが。おめへ方かた。  
青梅酒あお梅酒煮に。おいらがうはさをしたそう  
だの。圃むすこもこわいせ。圃なに。そ  
んなきざな事ことちやねへよ。おれと徳とく  
んと役者やくしやのひやうばんをしやした。圃  
徳とくさん程ほど仕合しあな者はねへよ。諸事しよじ孔明けいめい  
にまかしじやの。曹せうさんあのしうち  
がよかろうせ。圃おれもきんねん中に。  
徳房とくぼうといふ身みになりやす。圃おれが方  
の孔明けいめいといふ者ものはあるめへせ。圃仲達なかつた  
といふ者ものがあるよ。圃そこが諸事しよじまか  
せにすると言い事もきいたよ。しかしど

ふも合點のいかねへもんだ。マア口あたりがむめへが。ふぐ汁といふしうちの男にみへるせ。曹そうなにさ。そんな男じやねへ。せつきに勘定所へひとりおいても。あやうくねへ人物さ。曹先生のお目かねはちかうめへが。此頃おいらがむすこの近所だね。ひぞふのかへ犬が。きうに病がついてゐるのを。その亭主が気がつかぬから。ぐつと寵愛しやした。そこでやめへたと言もんだから。ごうてきにくれへついたそうさ。それで亭主も。其日のうちに極樂めへりさ。そこもかい犬にくはれめへせ。曹そのやうな白い曹公じやねへよ。しかししやばの極樂へゆくめへかの。曹おいらはいつでも承知さ。徳さんはどふだ。曹あまり極樂へめへりすぎると。孔明が方のしゆびがふでさ。曹びんばうな蜀主だ。今夜はおれがふるまつてやりやす。曹おきやあがれ。渴しても

とうせんの水をくらはす。つれの女郎といちやつかさだと。それより仕度にかかり。三人共大通のいしやうつけにて居る所へ。四ツでが三丁くる。曹小ぞうをよび。留主の内へ孔明がきたなら。ちとひへあたりで寝ていたといへ。弟が来たなら。獵にでたといへと言捨。三人草庵より四ツ手にのる。たれがばつたり。いぎつゑがからり。棒組いそぎだ。アイやつちやへ。こらちやへ。

松風の里

千代丘草菴主人

跋

歳々年々晒落新しとて中々近々  
未熟の小冊子晒落の晒落たる  
晒落もなす一管見の筆して古今  
粕とて争うりの文段祭りの何  
れかを切抜中坐の細見の近付武  
朱も方も逗中子つらに穴の穴も  
ひしまつげ金もつらぬ穴知振るも

管のく積のどくまゝあらうこらぢの  
まゝも小判の積あらう一おん正銘  
すまゝらう一けがまゝのふすまぢの  
一都下はまゝ大悟性を競はまゝ  
まゝはまゝ作者の氏神外には  
ふい〜ほち〜りのハ自撰主人一丸

跋

歳々年々晒落新し。そが中に近來未熟  
の小冊に晒落の晒落たる晒落もなし。  
管見の輩にして古人の粕をなめ淨る  
りの文段祭文のあはれを切抜中坐は  
細見の近付。貳朱壹分も逗中にわから  
ず。穴の穴たるひじまつげ。金もつかは  
ぬ。穴知振。見るも氣のどく。積のどく。夫  
とはあちらこちらから。まいたる小判  
の種おろし。正じん正銘まじりなし。一  
つぶゑりの小つぶながら。一部につゞ  
まる大悟悟道。競は雪とすみつこから  
作者の氏神外にはない。とほめ申もの

泉樓主人一丸